

# 教区だより

2022  
4月

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌 第385号

新型コロナウイルスの猛威が世界中を不安に陥れ、私たちの日本社会も計り知れない不安の只中にあります。これまで「当たり前」にしてきたことが当たり前ではなくなつた現実には直面し、あらためて考えさせられること、気づかされることも多々あるのではないかと思えます。私たちが当たり前にしてきた「日常」とは、実はどこにも約束されていない奇跡の連続であり、また人間の自我分別が思い描く理想は、常に事実の前に屈服せざるを得ないという道理も教えられます。いま、私たちは早期の事態終息を深く願ひながらも、このよくな時だからこそ、浄土真実を宗とする宗祖親鸞聖人の教えに身をさらし、聖人の教えに出会い直していくことが大切ではないかと思えます。

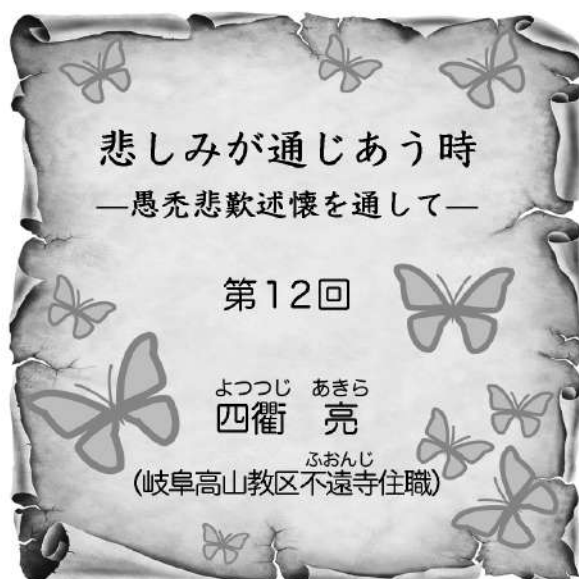


## 別れの辛さは 出遇いの深さ

※毎月掲載しております「ことば」は、教区駐在教導が担当しています。

## 目次

- 1頁 「ことば」
- 2頁 **連載** 悲しみが通じあう時 —愚禿悲歎述懐を通して—  
《第12回》 よつつじ あきら 四衢 亮氏
- 3頁 「今、この時に、親鸞聖人に会う」 さわ へ えりょう 澤邊 恵亮氏
- 4頁 教務所からのお知らせ  
**イマダカラ** 出版部会 とく だ じゅんこ 徳田 潤子



かなしきかなやこのごろの

和国の道俗みなともに

仏教の威儀をもととして

天地の鬼神を尊敬す

(聖典五〇九頁)

悲しいことにこの頃の日本の出家者も在家者もみな同じように、外側は仏教者の姿を取りながら、内心は天や地の神々に随い尊敬している。という内容です。

「威儀」について岩波書店の仏教辞典では、「仏教語としては、一挙手一投足、すべて他人に畏敬の念

を起させるような仏弟子の行動をいう」とされています。衣とか服装ということだけでなく、あらゆる行動・姿勢が仏教者としてのふるまいであることが求められるということです。威儀師・威儀僧という僧の行為を正す職務をおびた僧侶が置かれたことからも、その威儀が仏教を象徴することであったのでしょう。

そのような威儀を「もととする」のですから、その威儀を抛り所とし、自身の生き方の根本として外に仏教を表すのが、「このごろ」——親鸞聖人の時代の仏教者の在り方であったのでしょう。そして、在家の人々も、その現れた威儀の形に敬意を持ち、頼みとして、そこに仏教を見ていたのでしょう。

確かに外に現れた姿かたち、うやうやしく仏に向かい、儀式を執行するあり様は、威儀を保って仏教を表していますが、その内面においては、天地の鬼神を敬うことになっていることを悲しまれたのが、この和讃です。

「天地の鬼神」とは、どういう存在なのでしょう。和田綱先生は、『信の回復』の中で、私たち日本民族の心情として「冥顕心情」を挙げられ「それは、現実の日常世界⇨顕界の背後には霊の住む世界⇨冥界があつて、日常の吉凶禍福はすべて冥界の霊力によつて左右されるという民族心情です。」と示しておられます。その心情に基づいて「霊の種類が何であ

ろうと、それらはみな冥界から私たちの行為を見まもり監視し、吉凶禍福を左右する力をもった人間以上の存在であるという点では共通しています。したがって生存者は日常の一挙手一投足の一々にわたって霊の目を意識し、その冥慮、神慮をうかがい、戦々兢兢としてその意を迎えねばなりません。」ということになります。

その為、怒り恨む霊はこれをなだめ慰め眠らせる必要があり、守ってくれる霊はそれを褒めたたえてその利益を獲ようということになります。そしてその手立てとして仏教の儀式が位置付けられ、その冥界を司る天神・地祇と仏・菩薩を結び付けることになっていたのでした。

それは、業縁存在としての事実に見覚める仏教が、人間の除災招福の要求が加持祈祷によってかなうという迷いの中に人々を眠り込ませるものに変質してしまうことです。外側はいかに熱心でまじめな姿を示そうと、内側にある虚偽性を教えに知らされた親鸞聖人は、当時の日本の仏教にそのあり様を見ておられたのです。『改邪鈔』に、「たとい、牛盗とはいわるとも、もしくは善人、もしくは後世者、もしくは仏法者とみゆるように振舞うべからず」という親鸞聖人の言葉が伝わっています。内の虚妄を見失い、外を威儀で繕うことの問題をよくよく見つめられた言葉です。

「今、この時に、親鸞聖人に会う」



「お内仏に手をあわせる」

岐阜高山教区高山2組誓願寺

澤邊 恵亮  
さわべ えりょう

「言葉が返ってこないから話ができるんです。」

ご法事のお斎の席である方がお話されました。亡き人に語りかけても返ってこないから寂しいということはお聞きしますが、言葉が返ってこないから話せるとはどういうことなのかお聞きすると、お互いに勝負な性格で、母の生前は母から何かを言われると言いつ返し、母に何かを言うと言いつ返されるといふことだったらしいです。そのようなこともあり生

前には話がありできなかったそうでありすが、

亡くなられてからはお内仏に手を合わせ話をするのだそうです。話ができるのも母が何も言わないからでも、もし何か言葉が返ってきたら話にならなくなる、何も言わないから話ができるということでありました。そして、生前は母は間かん性格だと思っていたけど、改めて思うと自分も母に負けずに聞かんかったなど、母が話を聞いてくれればと思っていたけど自分が聞いたら母も聞いてくれたかもしれない、申し訳なかったとお話し下りました。でも今また母から何か言われたら、そんな気持ちも忘れて言い返してしまうだろうけど、と笑っておられました。

「経教はこれを喩うるに鏡のごとし」と中国の僧の善導大師は『観経疏』に記されています。お経に説かれてある教えは、私をうつす鏡のようであるということなんです。お内仏に手を合わせ母に話しながら、母だけでなく自分自身の姿にもこのご門徒さんは遇われたのではないのでしょうか。私たちの目は外を向いていて他のことはよく見えますが自分のこととなるとどうでしょうか。お経に説かれている教えは、鏡に喩えられるように、私の方を向いている内向き

の目をいたたくということです。私たちはお内仏に手を合わせます。申し訳なかった、ありがたいなと思った時には手が合わさります。

を」とがの一字の違いですが、手を合

せるといときは私からする行為であり、手が

合わさるといふ時には私に向いているものや私自身の姿に気づかされた時に自然となる行為なのではないでしょうか。お内仏に手を合

合わせることを通して、母に申し訳なかったという、手が合

さる心をお願いした。そしてその申し訳ないという

気持ちも、もし母から言葉が返ってきたら消え去ってしまうだろう自分の心を見たのだと思います。お内仏に手を合わせることを通して大切なことをい

だいた言葉なのかなと思います。

今はコロナウイルス感染拡大以前の二年前と比べると、誓願寺のことだけでも、毎月二十四日に勤めていた定例法座を中止しなければならぬ月が

たり、毎年の報恩講や彼岸永代経会の法要後のお齋を中止したり、法話の時間を短縮したり等、寺に集まって、一緒にお参りをし、聴聞する場が少なくなっています。

しかし、家にいる時間が増える今、お内仏の前に座る時間がとれる時なのかもしれません。

お寺でみんなが集まってという場を今できる形で作っていくことと同時に、各ご家庭のお内仏について勤められる、月命日や中陰、ご法事

の場を今まで以上に大切にしていかなければならないと感じるところです。

## 教務所からのお知らせ

## 《敬弔》

ご生前のご功労を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

山城第一組 正林寺前住職 大橋 祥吾

二〇二二年二月二十五日 九十一歳

山城第二組 教榮寺坊守 山香 治恵

二〇二二年三月四日 八十歳

近江第一組 等正寺前坊守 石原 禎子

二〇二二年十二月十九日 八十四歳

近江第二十五西組 福善寺住職 藤原 一磨

二〇二二年一月八日 七十八歳

石東組 徳泉寺前住職 岡本 義夫

二〇二二年一月二十七日 九十八歳

〔敬称略〕

## 《教務所事務休暇のお知らせ》

五月二日・六日を教区改編説明会の代休および計画的有休の付与による事務休暇とし、四月二十九日

(金)～五月八日(日)の期間、教務所を閉所します。

緊急(期間中の授与物のお渡しや院号字名の申請収骨の受付等を含みません)の場合は、緊急連絡先までご連絡いただきますようお願い致します。

〔緊急連絡先(教務所携帯電話)〕

090-3719-7982

## イマダカラ

昨年の年末に祖母が還浄した。施設に入居してから5年程元気で過ごしていたが、昨年の12月に乳癌が見つかった。祖母は身体が元気でよく食べていたため、癌が活発化したらしい。

数週間のうちに体が弱っていき、意識が虚ろな状態になった。手の施しようがないとの事で、最期は家族や親戚と相談し、「看取り」となった。新型コロナウイルスが蔓延してから入居者との面会は玄関でガラス越しだったが、「看取り」処置になると面会条件は緩和され、祖母の部屋まで会いに行くことが許された。

祖母は目を閉じた状態だったが体を動かそうと反応してくれた。手を握る力も体を動かす力も、命終えるまで全力で生ききろうとする力に溢れていた。そこには私の小さな1歳半の娘も一緒だった。まさに生老病死が一堂に会した場所になった。

祖母は最期まで生かされて生ききった姿を私に見せてくれた。祖母の「生きる」事に纏わる印象的だった思い出がある。それは90歳を目前に腕を骨折した後の事。腕に器具を装着して生活する事になり、「私、一生このまま(不自由な腕のまま)生きるんやろうか?」という事を話していた。90歳近い年齢で一生とは…。祖母は何年生きるつもりだったのか?と今は笑い話になっている。(出版部会 徳田 潤子)

## 編集後記 the editor's note

2月24日に、ロシアがウクライナに軍事侵攻(侵略)して以来、いやそれ以前に侵攻を匂わせてからか。なにやら世界情勢がきな臭い様になってきた。ファシズムや世界大戦という言葉を含んだ記事が新聞紙面を賑わすようになってしまった。この号が発刊される頃には治まってきているといいのだが。

水平社創立100周年の年。「戦争が最大の差別である」という部落解放同盟初代委員長松本治一郎の言葉をいま一度胸に重く受け止める必要があるのだと思う。5月19日に教区同和協議会の現地学習会で水平社博物館に行く機会を得た。改めて学びを深めたいと思う。(出版部会 蒲池 義圭)

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌

『教区だより』 第385号

発行人 日野 隆文(真宗大谷派京都教務所長)

発行所 真宗大谷派京都教務所

〒600-8164 京都市下京区花屋町通烏丸西入

Tel : 075(351)5260 Fax : 075(351)5256

発行日 2022(令和4)年4月1日

メールアドレス : kyoto@higashihonganji.or.jp

真宗大谷派京都教区ホームページ

京都教務所

検索

